

## SCTによる老人の自己概念の研究

下 仲 順 子\* 村 瀬 孝 雄\*\*

## 序論および目的

老年期の人格，とりわけ自己概念に関しては，心理適応の観点から研究が行われてきた。

自己概念は，人が自分自身についてもつ意識的認知像を指す心理学的概念であり，自己認知の良悪は個人の行動とりわけ適応を規定する主要な要因であることが明らかにされている。第二の人生の出発を余儀なくされる向老期においては老年期の老人の自己概念を把握することは，老人が残された人生を有意義に過ごすかあるいはそうでないかを予測する上でも重要であると思われる。

老年期の自己概念の正統的・心理学的研究は，我国では皆無に等しい。外国では Kuhlén, R.G. (1959, 1964a, b) が，人格が加齢と共に変化する過程を論じている中で，自己イメージ，自己認知，自信等は加齢と共に変化し50才以後の特性として自己を好ましいものとして概念化することは少なくなるだろうと結論している。

この自己概念の年齢的推移を検証した主な研究に，Bloom, K.L. (1961), Hess, A.L. & Bradshaw, H.L. (1970) の研究がある。Bloom は20～69才の男子を対象に ACL (Adjective Check List) の自己受容スコアを算出し年齢と自己受容との関係を考察し，自己受容は20才から増加し，50～59才に頂点に達し以後減少してゆくことを示唆している。Hess らは，16～65才，175名に自己概念スケールと理想自己スケールを施行し，55才～65才群は16～20才群より自己概念と理想自己が共に有意に高いという Bloom と異なる結果を得た。この理由として老人サンプルが今までの老人研究のサンプルよりも相対的に若く，教育，経済レベルも高いことがこの様な結果を生じたのではないかと考察している。Bloom 自身も彼の用いたサンプルが，一般集団として普遍化はできず結果は示唆にとどまると指摘しており，この種の研究においてサンプルの質や文化的要因を統制することが極

めて重要でありながらその実現は著しく困難であることをわれわれに教えてくれる。

年齢要因と自己の関係を明確に実証するのは容易ではなく，方法論等多くの障害が横たわっている。とくに老年期では，老人のおかれている社会環境差，社会参加の有無，肉体的知的変化，家族・友人関係，価値観等の内的外的要因が自己概念に作用するといわれている。

この社会環境要因と自己概念の関係をみた代表的研究では，Mason, E.P. (1954) が環境変数（過去・現在の経済状況と生活条件）と自己概念の関係を施設老人（平均年齢74才），居宅老人（70才）および成人（34才）に面接調査と5つの心理テスト（自己概念，態度，社会性スケール等）で調査し，施設老人は居宅老人よりも否定的自己概念が多く，両老人群は成人群よりもより否定的な自己概念が多いことを示した。

Preston, C.E. & Gudiksen, K.S. (1966) は，65才以上の老人242名を過去の社会的地位，生育歴，家族歴，収入，知能から5群に分類し，自己評価と老人による老人像評価を調査し，収入の低い階層の老人は，中上流の老人よりも自己満足度，幸福感情，社会的好ましき等で否定得点が有意に多いことを示した。

上記の二研究で社会環境要因の影響が検証されたが，それでは自己概念のどの領域がどの様なメカニズムに従って影響されるかといったかかわり方までは追求されていない。

我々は，以上の自己概念の諸結果を考慮に入れ，それでは日本の老人の自己概念と社会環境要因の関係はどのようなのだろうか，老年期で加齢による自己概念の変化及び発達はあるのだろうか，を探索し得られた結果から老人の基本的心性についての科学的知見を得ることを目指した。

## 方 法

## 1. 老人用文章完成テストの作成

文章完成テスト（以下 SCT と記す）は，老人独自の

\* 東京都老人総合研究所心理学部心理研究室

\*\* 国立精神衛生研究所精神衛生部

関心や態度、感情、欲求など老人の生活空間や行動での諸特徴を探索的にしかも比較的構造化し易い形で知りうる利点をもつ。

また SCT は投映法的一种と呼ばれているが一般に高い妥当性、信頼性が実証されていることもこの方法を本研究に用いた重要な理由となっている (Goldberg, P.A. (1965)。

本研究の SCT は、われわれの研究目的に沿って経験的に以下の点を考慮に入れ、老人用 SCT として作成されたものである\*。

- 1) 刺激文が人格の多くの面に関する情報をとらえうること。
- 2) 刺激文の数は、老人の肉体的精神的負担にならないよう最小限に抑えた。
- 3) 老人が気楽に表現できる様に一人称様式にした。
- 4) 老人向の刺激文として老化や健康のイメージや過去経験に関するものを挿入した。
- 5) 形式は老人の日常的習慣を考慮に入れて項目は縦書きにし、活字余白は大きくさらに漢字にはカナをふりつけた。

当初38項目を試作的に少数サンプル(5名)に実施し、施行方法、所要時間、意味内容が重複しやすい項目、意味をとり違えやすい項目などを検討し、更に数回の改訂を経て最終的には TABLE 1 の22項目に決定した。

33項目の構成内容としては、老人の自己への過去・現在・未来でのかわり方、価値観、家庭イメージを明らかにしやすい項目が多くを占めた。

## 2. 対象者

本対象者は全員女性老人である。

これら対象者は居宅と施設(養護)という環境を異にする二集団からなる。加齢による発達的变化をみるために対象者を60~74才代(老年期の低年齢群)と75才以上(老年期の高齢群)の二群に分類した。75才で分類した理由は、①75才をピークにして老化現象が著明となることが関ら(1967)の研究で示されている。②日本の老人の平均寿命(昭和48年度)が75才である。③75才で大別することにより対象者数がほぼ等しくなる、ことによる。TABLE 2 は、対象者の人数、平均年齢等を示している。

サンプルの抽出選定に際しては、①反応拒否が15以上の者、②施設老人では長谷川(1974)の痴呆診査スケールで痴呆、準痴呆と判定された者、③明らかに疾病(精

\* 作成に際しては、榎田ら(1965)の老年者用 SCT を参考にした。

TABLE 1 老人用 SCT 項目

この紙をめくると、いろいろ書きかけの文章が並んでいます。その文章をみて、あなたの頭に最初に浮かんできたことを、それにつづけて書いて、文章を完成してください。正しい答、まちがった答というものはありませんから心配しないで思ったとおりに書いてください。

- 1 たいていの家庭にくらべると私の家庭は
- 2 友だちづきあいは、私にとって
- 3 私の身体は
- 4 生きるということは
- 5 若いころ、私は
- 6 私にとって、社会(世の中)は
- 7 私が残念なのは
- 8 年をとると
- 9 私が気になるのは
- 10 これからは
- 11 私は、よく人から
- 12 死というものは
- 13 私がうらやましいのは
- 14 いつかそのうち、私は
- 15 若い時、私の家庭は
- 16 私が不安に思うことは
- 17 私が生きている喜びを感じるのは
- 18 六十才をすぎたら
- 19 ときどき、私は
- 20 今の私の生活は
- 21 私はきょうだいと
- 22 私とよく気の合う人びとは
- 23 これまでは
- 24 私の子どもは
- 25 私の一番の弱点は
- 26 よく思い出すことは
- 27 今の若い人は
- 28 妻(夫)と私は
- 29 もし私が若かったら
- 30 私のたのしみは
- 31 家の人びとは、私を
- 32 私の人生は
- 33 私のいいところは

神的障害を含める)のある者、は対象から除外した。

対象とした老人ホームは、定員150名からなり、職員が老人の私生活に立ち入らない、など個人尊重の立場を重視しており、ホームは開放的で自由な生活ができる様配慮されている、という従来の老人ホームとやや異なる特徴をもっている。一般の施設老人よりは施設の悪影響(Institutionalization)をうけていないといえよう。

居宅老人は、全員家族と同居しており典型的な中産階

TABLE 2 対象者

	居宅老人	施設老人		年齢 居宅：施設 t検定
		在在年数(月)		
60~74	N=24 $\bar{X}$ =67.17 SD=3.85	N=38 $\bar{X}$ =70.0 SD=2.96	$\bar{X}$ =41.95 SD=31.119	3.21 p<0.01
75~	N=22 $\bar{X}$ =77.95 SD=2.57	N=31 $\bar{X}$ =79.26 SD=2.93	$\bar{X}$ =44.10 SD=33.921	1.64 n.s
t検定			0.271 n.s	

級に属している。また老人クラブ、老人学級に参加していることからどちらかといえば積極性に富んでいる老人が多いと考えられる。これら両サンプルは居宅・施設群の母集団から統計学的に抽出されたものではないので両群を一般的に代表しているとはいえない。むしろ両群共平均的な居宅・施設老人群よりもより高い活動性や積極性にめぐまれていると想定される。

### 3. 反応の整理および分析方法

反応の整理は今までの SCT 研究でなされた分析方法 (Carp, F.M. (1967a, b), 村瀬 (1973)) を参考にして全反応をすべてカードに書抜き、項目毎にカードを分類した。この手続きをふむことによって Halo 効果を防ぎ他項目の影響をうけることなく客観的分析が行われた。

次に項目毎に6つの大カテゴリー、①肯定的感情を反応するもの、②否定的反応、③中立的反応、④肯定否定を含む反応、⑤反応拒否、⑥その他、に従って分類された。さらに必要に応じて下位カテゴリーを設定し適用した。一例をあげると、項目4、生きるということは……の反応は、①讚美(すばらしいことだ……) ②肯定的価値づけ(大事なことです) ③感謝(ありがたいことといつも思っています)の3つの肯定的反応の下位カテゴリーと①困難感(大変である) ②拒否感(もう沢山だ) ③消極的価値づけ(自分の用が足せるまでのことだ)の否定的反応の3つの下位カテゴリー、中立(一種の技術である)という風に分類される。

分類方法の信頼性については検討しなかったけれども類似の方法を用いた研究(村瀬, 1974)では高い信頼性が確かめられている。

### 4. 施行方法および時期

施設老人に対しては、1973年6月~10月にかけて個別法で行った。なおテストをうけることには協力的であるが手のふるえ、極度の老眼などで文章を書くことが困難

な者は必要に応じて口述筆記により検査を行った。居宅老人は老人クラブ、老人学級の参加日(1973年11月、1974年8月)に集団法で実施した。

## 結果と考察

### 1. 家庭イメージ (TABLE 3)

結果：a) 居宅老人の特徴 現在の家庭観および家庭内での自己認知は年齢差なく一貫して施設群より肯定的感情を有している。これは兄弟、子どもに対するイメージでも同様である。b) 施設老人の特徴 居宅低年齢老人に比較して施設低年齢老人は家庭イメージが否定もしくは中立的である。ところが高齢群になると過去、現在の家庭観や家庭内の自己認知のすべての点で否定的反応は低年齢群より有意に少なくなって著しく肯定的家庭観が増大する。この様な年齢による家庭観の変化は居宅群にはみられないものである。c) 年齢的变化 若い頃の家庭を回想しての反応で、施設・居宅両群共に低年齢群は高齢群に比してより否定的(p<0.01)であり、高齢群はより肯定的(p<0.01)である。

考察：居宅老人が肉親関係については施設老人よりもより肯定的感情を抱いているのはわれわれの調査した居宅老人が肉親関係を他者に対して一応肯定的なものとみせうるだけの基本的な肯定感情や自我の強さ、防衛力などを備えているためと解釈できよう。かれらが家族関係にある程度以上適応していることもわれわれの結果からよく理解できる。

一方施設老人は、低年齢群で施設高齢群よりも否定的感情表現が多く、肉親関係を情緒的感情的レベルでみがちの傾向があらわれている。これは高齢化によって人間関係での傍観的見方が強まるか、もしくは自己の過去を美化しがちになるために否定的感情が弱められるものと推察される。

### 2. 友人イメージ (TABLE 4)

友人交際の意義(友だちづきあいは、私にとって…)

結果：a) 居宅老人の特徴 友人交際の意義については70%以上の者が肯定的価値づけをしている。b) 施設老人の特徴 困難感や否定的感情、友人交際をしない、ないと表明する者が低年齢群26.3%、高齢群29.0%示され、居宅老人の各々0%、4.5%の頻度と対照的である。

友人像(私とよく気の合う人々は……)

結果と考察：c) 年齢的变化 施設、居宅共高齢群に自己と他者との間に距離をおいた感情交流の少ない客観的姿勢を示す者が低年齢群より有意に多くなっている点が特徴的である。これは多分に高齢化からくる生活範囲の

TABLE 3 家庭イメージ

(数字は%を示す)

		居宅老人			施設老人			居宅：施設	
		60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~
家庭観	Pos (親和, 交流, 感謝)…平和, たのしかった, いろいろ気を配ってくれてありがたい	62.5	59.1		36.8	35.5		***	***
	Neg (孤独, 不和, 経済的困難, 苦勞感)…淋しい家庭だった, 不遇, 貧乏だった	12.5	13.1		23.7	9.7	***	**	
	Nt …普通, 規則正しい, 少人数	20.8	22.7		23.7	35.5	*		**
過家去庭の	Pos (親和, 交流)…たのしい家庭, 円満, 幸せ	33.3	59.1	***	47.4	64.5	**	**	
	Neg (否定的客観記述, 否定的感情)…冷たいものだった, よくなかった, 複雑だった。	45.8	18.2	***	31.6	0	***	a)	
家自庭己で認の知	Pos (親和感, いたわり, 配慮, 羨望, 期待)…大事にしている, 協力してくれる, たよりにしている	70.8	63.6		31.3	52.4	***	***	
	Neg (被拒否感, 軽蔑, 同情的)…よく思っていない, よけい者扱い, バカと思っている, ふびんと思っている	12.5	18.2		37.5	9.5	*	*	
兄弟	Pos (親和, 交流)…仲がよい, 信頼し合ってきた	58.3	59.1		34.2	35.5		***	***
	Neg (否定的感情, 非親和)…縁がうすい, よくない	20.8	13.6		23.7	6.5			
子供	Pos (親孝行, 肯定的人柄記述, ⊕の客観描写)…やさしい子, 気立がよい	66.7	54.5		28.0	27.3		***	****
	Neg (被害的, 依存, (-)の性格描写)…性格的に暗さがある, 気が弱い	8.3	18.2		20.0	0			**
	Nt …〇人いる, ふつう	20.8	27.3		13.2	12.9			

\* p<0.10 \*\* p<0.05 \*\*\* p<0.01 \*\*\*\* p<0.001 a) 直接確率法にて検定

TABLE 4 友人イメージ

		居宅老人			施設老人			居宅：施設	
		60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~
交際の意義	Pos (快, 楽しみ, (+)の価値描写)…楽しみ, よろこばしいこと, 大切, 尊いもの	79.2	81.8		60.5	48.4			***
	Neg (困難感, 否定的感情)…求めにくい, 一番難かしい	0	0		7.9	3.2			
	しない, ない	0	4.5		18.4	25.8		***a)	***a)
友人像	Pos (⊕の性格描写, ⊗状況描写)…円満でやさしい人, 正直な人, うちとけ合っている	37.5	4.1	**	18.4	19.4		***	
	Nt (客観記述, 人数)…郷土の人, 同じ年の人, 特定名	33.3	72.7	***	26.3	64.5	***		
	Neg (不満, 否定)…なかなかない, むずかしいからあまりつきあわない	20.8	18.2		18.4	9.7	*		

縮小が影響している。いずれにせよ前述の家庭イメージと同じく高齢者では人間関係での傍観的な見方が顕著になることが友人の関係においても明らかに示されたといえよう。

3. 健康イメージ (TABLE 5)

結果：c) 年齢的变化 施設, 居宅共低年齢群が健康に対し否定的感情を抱いている。他方自己を健康と感じている者は総じて高齢群にみられる。低年齢群の否定的反応の内容分析では, 施設老人で自己の肉体上の不健康さを表明している者は著しく多く, 一方居宅老人の否定的反応では自らの老化の状態をのべている者が多くを占めている。

考察：老年期の中で比較的若い老人が否定的健康観を表明していることは高齢期に入る前の老人の不安感の反

映と考えられるが, 不安感の表明のあり方が居宅と施設老人で異なっていることが注目される。

高齢群の肯定的健康認識は, 老化への適応に伴う心身の安定性, 死に対する防衛機制あるいはサンプル自身の生物学的淘汰による要因等が関与していることが考えられる。一般に老人の不安形態は直接的でなく間接的に身体的表現をとることが多いといわれている。われわれの研究結果でも, 老人の不安懸念は直接的な形式では表明されず, 上記の様な健康へのかかわり方のうちに彼らの実存的不安が反映したと考えて良い。この考えに立つならば, 高齢になると肯定的健康イメージに変化してゆくとわれわれの所見も高齢化に伴う不安の減少を示すものと解釈できる。

この解釈は70才以後に不安が減少するとの池見ら(1974)の研究結果とも一致する。

TABLE 5 健康イメージ

	居宅老人			施設老人			居宅：施設	
	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~
Pos (健康)…健康, 丈夫, 老人としては健康の方	45.8	54.5		31.6	51.6	***		
Neg 〔不健康(病気)…胃が弱い, 高血圧で悩む 老化(こだわり)…たくましさがなくなった, 不自由になった, 骨が老化している	54.2	31.8	***	57.9	48.4			**
	20.8	13.6		50.0	32.3	**	**	
	33.3	18.2		7.9	16.1		***	

TABLE 6 自己の過去・現在・未来のイメージ

	居宅老人			施設老人			居宅：施設	
	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~
若い頃の自己像	Pos (幸福感, 充実感, (+)の記述)…楽しくくらし, 明かるく人に好かれた, とてもよく働いた	50.0	40.9		55.3	61.3		***
	Neg (苦労感, 不幸感, (-)の記述)…楽しいことはなかった, 道楽者だった, わがままで気が短かかった	25.0	36.4		28.9	19.4		***
	Nt (客観的自己記述, 生活記述)…商人だった, 本を読むのが趣味だった	12.5	22.7		13.2	16.1		
現在の自己像	Pos (労働, 趣味への意欲, 快, 希望)…まだ働く, たのしく暮したい	50.0	18.2	**	26.3	6.5	*	***
	Neg (死の受容, 老化記述, 失望感, あせり, とまどい)…いつ死んでもかまわない, 夢も希望もなし	25.0	22.7		47.4	51.6		***
	Nt (変わらず, 未定)							
他己像	Pos (健康, (+)の性格, 行動, 親和)…丈夫といわれる, いい人といわれる, よくされる。よく働くといわれる	70.8	40.9	***	34.2	19.4	**	***
	Nt (ふつう, 客観記述)+わからない	0	18.2		26.3	35.5		***
	Neg (-)の性格行動)…バカといわれる, 笑われる, ガンコだから憎まれるかもしれない	12.5	22.7		15.8	22.6		
自己の弱点	1. 性格面(内向, 攻撃, 外向etc)…気が弱い, カツとくる, せっかち, 神経質	66.7	63.6		50.0	41.6		**
	2. 能力面…頭がわるいこと, 字が書けないこと	0	4.5		0	6.5		
	3. 健康面(老化も含む)…腰がいたい, 体が弱い, 耳がきこえないこと	20.8	4.5		13.2	12.9		
	4. ない, わからない, その他	12.5	27.3		36.8	45.2		*
未来像	Pos (行動しようとする意欲, 健康増進, 楽しい老後の願望)…社会のため人のため出来るだけやりたい, ほがらかにくらしたい	70.8	63.6		71.1	54.8	**	
	Neg (死の希求, 現状の維持, 依存)…死を待つばかり, らくに死にたい, なりゆきまかせ, ホームまかせ	8.3	13.6		15.8	32.3	***	
	その他(Nt+Rej, わからない, その他)	20.8	22.7		13.2	19.4		

4. 自己の過去・現在・未来イメージ (TABLE 6)

若い頃の自己像 (若い頃, 私は……)

結果：居宅, 施設共肯定感情を表明している。とくに施設高齢群にこの傾向が著明である。

現在の自己像

1) 現在像 (60才をすぎたら……)

結果：a) 居宅老人の特徴 居宅低年齢群は施設低年齢群より肯定的感情を有している。b) 施設老人の特徴 居宅老人と比して否定, 客観記述が有意に多い。c) 年齢的変化 居宅施設共高齢群程肯定的自己像が少なくなっている。

2) 他人からみられる自分についての認識 (私はよく人から……)

結果：a) 居宅老人の特徴 両年齢共施設老人に比し自分の性格面を好意的にみられているとの認識が強い。(p<0.01) b) 施設老人の特徴 客観記述, わからないという反応が低年齢群26.3%, 高齢群35.5%あり, この種の反応が居宅老人で各々0%, 18.2%なのと対照的である。c) 年齢的変化 居宅施設共高齢群程肯定的表明が低年齢群と比べて有意に少なくなっている。

3) 自己の弱点認識 (私の一番の弱点は……)

結果：a) 居宅老人の特徴 年齢差なく施設老人よりも自己の弱点として自分の性格面を認識している者が有意に多い。b) 施設老人の特徴 居宅老人に比して「ない」, 「わからない」といった自分自身の弱点を直視することをどことなく避ける傾向がはるかに顕著である。

未来像（これからは……）

結果：a) **居宅老人の特徴** 総じて未来に対して積極的である。更に内容面では奉仕、勉学、労働といった自己の価値を社会の中で実現し発展させる方向に意欲や関心を示した者が各々33.3%、36.4%もみられた。b) **施設老人の特徴** 低年齢群は肯定的という意味では居宅老人全体と共通した特徴を示したが、内容的には異なり自己の健康増進あるいは自己の老後（主に生活面）に関心を払う者が26.3%であった。高齢群では、消費的、現状維持的、他人まかせといった内容をもつ否定的な未来イメージが低年齢群より有意に多く、この違いは居宅老人群には示されていないものである。

考察：居宅老人は過去の自己像および現在の自己像共肯定的見解をもっていると同時に自己に対する自省も十分に有している。またこの特徴は若い年齢層の老人の方により明確に示されている。他方施設老人では、現在の自己自身の認識が曖昧で現実の自己を直視することをさけている所がみられ、とくに高齢老人では自分の未来に対する消費的な姿勢が強く示されている。

序論で述べた如く自己概念は老人の適応を予測する要因としてみられ、肯定的自己イメージの維持は自信と関係している (Brozek, J. (1952), Kogan, N. & Wallach, M. (1961) といわれているが、われわれの得た結果も同様のことを示していると解釈されうるだろう。

5. 価値観 (TABLE 7)

生と死について

老人にとって今までの生とこれから直面する死とをどのように認知しあるいは評価するかは、残された時間（未来）での適応にも直接かかわる極めて切実な実存的課題である。

1) 生きるということ

結果：a) **居宅** 低年齢老人は生を肯定する者と否定する者がほぼ同率を示している。高齢群になると生の肯定が低年齢群より有意に増加している。b) **施設** 年齢的差異にかかわらず過半数の者が否定的感情を表明している。

2) 死について

結果：a) **居宅** 総じて死を客観視してみている者が施設人全体より有意に多い。b) **施設** 死を肯定的なものとして受け入れむしろ期待を表明している者が居宅老人全体より多く、とりわけ高齢群にこの傾向が強くて出ている。

考察：居宅老人は生きることにより肯定的であり、死を肯定するよりもむしろ客観視して冷静にみている。また4の未来像も、残された時間を出来るだけ充実させ有効に使おうという意欲が示されており、この機制は自己以外の外的世界や他者への関心につながっている。施設老人は、生よりも死を肯定し未来での関心は自己中心的（自己の健康増進）内的世界志向である。この価値意識の違いの原因については前述の自己像と関連させて後述したい。

生きがい、楽しみ

結果：老人全体に共通して趣味に楽しみ、生きがいを求める者がほぼ1/3にみられる。しかしそれ以外に楽しみ、生きがいを見出す老人については居宅施設間に違いがあった。a) 居宅老人は趣味以上に友人家族との交わりをあげている。b) 施設老人では、楽しみなし、単なる気分転換、食べる、寝る、風呂に入るといった退行的もしくは原始的快への関心を表明した老人が居宅老人より有意に多く示されていた。楽しみ、生きがいは今までの生きてきた方法および未来へのかかわり方と密接しており前

TABLE 7 生と死・楽しみ

		居宅老人			施設老人			居宅：施設	
		60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~	$\chi^2$	60~74	75~
生	Pos (讚美, 肯定的価値づけ, 感謝, 願望)…すばらしい, 大切なことである, 大変だが社会の役にたちたい, 人のためにつくしたい	33.3	54.5	***	39.5	32.3			***
	Neg (困難感, 拒否感, 消極的価値づけ)…困難多く楽でない, 年をとっては良し悪し, もう沢山	37.5	40.9		50.0	51.6		*	
死	Neg (肯定, 受容, 願望)…嫌ではない, まちどおしい, いつきてもいい, そうなりたい	20.8	31.8		44.7	64.5	***	**	****
	Pos (否定, 恐怖, 悲哀感)…おっかない, こわい, 悲しいこと, 難かしい	16.7	22.7		10.5	3.2			
	Nt +考えたことなし, Rej	54.2	45.5		31.6	32.3		***	*
楽しみ	1. 対人関係(友人, 家族)…友と会うこと, 子供の所へ遊びに行く	41.7	45.5		2.6	6.5		***	***
	2. 趣味…読書, 三味線, 植木いじり, 音楽, おどり	37.5	27.3		34.2	32.3			
	3. なし+身体的快(お風呂, たべること)+Rej	4.2	18.2		42.1	45.2		***	*
	4. その他(TV, 信仰, 労働, etc)	16.6	9.0		21.0	16.0			

述の生および未来像から考えて彼らにおける生きがいなどについての否定的結果はうなづけるものである。

結 論

1. 居宅・施設老人の特徴

居宅および施設老人の諸特徴を総合してまとめたのがTABLE 8である。

居宅老人は施設老人に比し自己をより冷静客観的にうけとめている。自己について基本的には肯定的な認識をもち、他者への働きかけは積極的である。これは自己の未来像についてもいえる。この様に居宅老人は直接的にも間接的にも社会と結びついているし、また結びつこうとする姿勢がある。その反面では自己についての内省、批判力も十分に備えている。

施設老人は自分を直視することをさけようとする自己回避的な点が特徴的であり、故に現在の自己像もはっきりしない。また自己の未来、自己以外のものに対する興味、等が対社会とかかわりあいをもったものではなく、自己本位的な内的世界中心となっており高齢老人程その傾向が強くなっている。

両群の人格特徴の根本要因を集約すると、①社会とかかわりあい（外的世界志向一内的世界志向）②対人関係の質と働きかけ（役割認識ある一ない）③未来へのかかわり方（積極的—自己中心的・消極的）が考えられる。これらは自我心理学の立場からみた自我の代表的諸機能の一部とも一致するものである。われわれが研究の対象とした居宅老人が、家族と同居できうるだけの自我統制力と老人クラブ・老人学級に参加するという目的をもった行動（自発的社会参加）をとりうる能力とを備えていることは、予め明らかであったが、われわれの研究

結果から、こうした客観的外的条件の基盤には自我の自律性機能が相対的にみてかなり優れており、彼らが強い自我をもっていることが示唆された。

もっとも居宅老人とちがい施設老人では施設という現在の環境が人格特徴に影響を及ぼすのではないかという反論が予想される。しかし施設老人の約3年6か月という短い平均在所期間が彼らの人格、とくに自己像に決定的影響を及ぼすとは考えにくい。たとえば、元来明確で肯定的な自己像の所有者が入所によって、曖昧な自己像を示すようになる可能性は殆ど考えられない、また施設老人における家庭イメージが否定的もしくは中立的であるのも基本的には施設入所以前からの傾向が反映されたものと考えたい。入所による影響があったにしてもこの元来の傾向が少し強まったという程度に留まるものと思う。それ故われわれは、上記に示された施設老人の人格特徴に対して環境的要因は二次的要因として影響を及ぼすだろうが本質要因ではなく、むしろ成人期までに形成された自我の弱さが、壮年期では必ずしも表面化されなかったけれども施設という集団に加わることによって強く顕現化したと推測している。

2. aging による変化

TABLE 9 に加齢による心理的変化を要約した。自己像の肯定の減少、友人・家庭イメージの傍観視等の変化の方向が示された。

Cumming, E. & Henry, W.E. (1959, 1961) は aging process における変化について disengagement theory を提唱した。この theory は老年期の本質を中年期の engagement を特徴とする状態との対比において理解しようとするもので、社会的および心理的变化の二面が含まれている。中年期の特徴である engagement とは自ら積極的に社会活動に参加し成就欲求の実現をはかる状態を指し、外的世界志向を特徴とする。（日本語の「参加」は具体的個別的な活動を対象としており、全人格的な基本生活態度を抽象的に表現する用語としては適切でないと思われる）。社会関係からみて加齢と共に生活空間の縮小を伴う社会からの遊離がおこり、この様に disengage した結果として、他者からの批判などが気頭からなくなり且つある種の気楽さを伴った (carefree な) 自己中心性が目立つような老人特有の行動様式や反応をと

TABLE 8 総合特徴

	居宅老人	施設老人
家庭イメージ	肯定的感情・親和・交流	中立的 否定的} → 肯定的傍観視
若い頃の自己像	肯定的 回顧	
現在の自己像	肯定・明確に把握	曖昧・不明・客観視
未来像	積極的 (外界とかかわり合い大)	自己の健康→消極・現状維持 (他人まかせ)
生死	両価的→肯定 客観視	否定的 肯定視
楽しみ	友人・家族との交わり	なし、気ばらし

TABLE 9 aging による自己概念の変化

変化の側面	変化の方向(低年齢→高齢)
現在の自己イメージ	肯定の減少
他人からみられる自分についての認識	肯定の減少
友人イメージ	消極、傍観視・中立化
過去の家庭イメージ	肯定の増加・否定の減少
健康イメージ	否定の減少

るようになると定義づけている。この場合 disengagement 概念そのものはより社会的な側面に重点がおかれている。

加齢による人格機能の力動的変化については、Rosen, J.L. & Neugarten, B.L. (1960), Neugarten, B.L. (1963) らが上記の理論を発展させて独自の仮説を提示した。彼らは Hartman の自我心理学に基づき加齢と共に外的世界とのかかわりあいを維持するために必要とする ego-energy が減少してゆき、老人は刺激を広い範囲で統合したり込み入った葛藤的な事態を受け止めたり処理することが少なくなる。また愛情面の表出や受容も少なくなり受身的、非活動的な方向に向かうと示唆している。

この disengagement の見解に対しては老人一般に全面的には適用し難いとの反論や反証も出されている。

われわれの得た結果のうち、TABLE 9 に示された「友人関係の傍観視」や「肯定的自己像の減少」等の変化は、disengagement 理論によって説明できる。しかし TABLE 10 の加齢変化に示された居宅老人の「生の肯定増加」と施設老人の「家庭での自己認知および健康イメージの肯定増加」は必ずしも disengagement では説明できない。居宅老人で加齢により生の肯定が増加する点は反応内容を質的に検討した結果から、むしろ disengagement とは正反対の老人独特の積極的 engagement の姿を示すものと考えらるべきであろう。施設老人の場合には、表面的肯定あるいは美化による現実否認的防衛機制\*（代表的防衛機制の1つで不安をもたらす現実を否定することによって自我の統合を保とうとする試みを指す）が多少とも作用していると考えられる。

以上の考察をふまえてわれわれは aging の過程に関して次の様な試案的仮説を提唱したい。

#### 〈試案的仮説〉

aging の過程には、①disengagement、②老人独特の engagement、③否認による防衛、の少なくとも3つの機制が関与しており、それらの関与の程度や仕方は尊ら

TABLE 10 加齢変化に示された居宅施設老人の特徴

	居宅老人	施設老人
家庭イメージ	変化なし	否定減少・傍観増大
家庭での自己認知	変化なし	否定減少・肯定増加
未来像	変化なし	肯定減少・否定増加
健康イメージ	否定減少 中立、その他増加傾向	肯定増加 中立、その他減少傾向
生	肯定増加	変化なし
死	変化なし	肯定増加

個人の自我の強さの程度によって規定される。

これら3つの機制のうち、①の disengagement については常識的観察と一致するところでもあり、aging の一般的機制を大きくとらえた普遍的な機制として既に大方の承認するところとなっているといえよう。②の老人独特の engagement は相対的に強い自我をもった老人において最も明かにあらわれる機制と考えられるが、われわれの研究結果のみからは十分な証拠が集められたとはいえず、今後の検討にゆだねられる部分が多い\*\*。

③の防衛機制は②の場合と対照的により弱い自我をもつ老人に特徴的にあらわれ易い。この機制は①の disengagement がもたらす自我のエネルギーの低下の程度が強まった上で特殊の様式をとってあらわれたものと考えられる。この意味では disengagement と連続的なものともいえるがその特殊性の故に一応 disengagement とは区別すべきだとわれわれは考えている。勿論、②③の両機制は同一個人内においても併存しうるものであり、①の機制の土台の上にどの様な社会的、個人的条件の相違によって②、③の機制が加わり1つの全体的体制を形づくるかについても今後の研究が期待されることである。

#### 要 約

SCT に投映された女性老人の自己概念を、自己イメージおよび対人態度、価値観等を中心に探究し、さらに発達の見地から加齢による自己概念の変化をみることを

\* Kübler-Ross, E. (1969) の「死の瞬間」の研究で解明された否認機制の働き方を参照されたい。

\*\* 本稿完成後に知りえたことであるが、前記 Cumming, E. との協同研究者であった Henry, W.E. も学会発表 (1963) において老人の reengagement について示唆した由であるが詳細は不明である (Tallmer, M., & Kutner, B. (1969)).

目的として、現在生活環境を異にする居宅老人と施設老人を対象に行った。

1) 居宅老人は家庭イメージ、家庭内の自己認知、友人イメージ等に肯定的感情を示し、自己像も明確に把握され未来への関心も積極的である。加齢による変化はあまり顕著にはあらわれない。

2) 施設老人では、加齢による変化が顕著である。低年齢老人では家庭イメージ、肉親関係を感情的レベルで否定的にみるかあるいは中立的見方をしがちである。自己像は年齢を問わず曖昧、自己回避的であり、また生の否定、死の肯定視が顕著である。

以上の間人関係でのイメージ、自己概念、価値観の違いは基本的には自我機能の強さの程度と解釈され、加えて生活環境の外的条件の差が居宅老人にはより有利に、施設老人では不利に影響していると考察される。

3) 加齢による発達の变化は、対人関係の消極化、肯定的自己像の減少など disengagement な側面と過去家庭イメージの肯定化、否定的健康イメージの減少など disengagement 以外の機制によると考えられる側面が示された。また、加齢に伴ない居宅老人で生の肯定の増加が示され、施設老人では家庭での自己認知、健康イメージの増加があらわれ、両群の自我機能の強さがこの過程にも反映されていた。なお加齢の過程についてわれわれの試案的仮説が提唱された。

本研究の対象者は全員女性であったが、サンプルの選定と人数からみて日本の平均的女性老人をどの程度代表しているかは明かでない。われわれの得た知見の普遍性については今後よりきめの細かい方法論に基づいて実証さるべきであると考え。また老人心性一般を解明するためにも、男性老人の研究が必要である。われわれは、aging process での心理機制的解明と合まって男性老人を対象として同一の方法論に基づく研究成果についても近く公表の予定である。

## 文 献

- Bloom, K.L. 1961 Age and the self-concept. *Amer. J. Psychiat.*, 118, 534-538
- Brozek, J. 1952 Personality of young and middle-aged normal men: Item analysis of a psychosomatic inventory. *J. Geront.*, 7, 410-418
- Carp, F.M. 1967a The application of an empirical scoring standard for a sentence completion test administered. *J. Geront.*, 22, 301-307
- Carp, F.M. 1967b Attitude of old person toward themselves and toward others. *J. Geront.*, 22, 308-312
- Cumming, E. and Henry, W.E. 1961 *Growing old*. New York: Basic Books.
- Goldberg, P.A. 1965 A review of sentence completion methods in personality assessment. In Moustain, B.I. (Ed) *Handbook of projective techniques*. Basic Books: New York
- 長谷川和夫・井上勝也・守屋国光 1974 老人の痴呆診査スケールの一検討 *精神医学* 16, 965-969
- Henry, W.E. and Cumming, E. 1959 Personality development in adulthood and old age. *J. Proj. Tech.*, 23, 383-390
- Hess, A.L. and Bradshaw, H.L. 1970 Positiveness of self-concept and ideal self as a function of age. *J. Genet. Psychol.*, 117, 57-67
- 池見西次郎・松本建一 1974 老人の神経症—精神身体医学の立場から 2 老人の心身相関 a aging における精神的变化 加藤正明・長谷川和夫(編) *老年精神医学*
- Kogan, N. and Wallach, M. 1961 Age changes in values and attitudes. *J. Gerontol.*, 16, 272-280
- Kuhlen, R.G. 1959 Aging and life adjustment. In Birren, J.E. (Ed) *Handbook of aging and individual*. Chicago: Univ. Chicago Press.
- Kuhlen, R.G. 1964a Personality change with age. In Worchel, P. and Byrne, D. (Eds) *Personality change*. New York: John Wiley & Sons.
- Kuhlen, R.G. 1964b Developmental changes in motivation during the adult years. In Birren, J.E. (Ed) *Relations of development and aging*. Springfield Illinois: C.C. Thomas.
- Kübler-Ross, E. 1969 *On death and dying*. Macmillan. (川口正吉訳(1971) *死ぬ瞬間* 読売新聞社)
- 榎田仁・梅津耕作・宮本千鶴子・藤本紋子 1965 老年者のパーソナリティ特徴について *精神医学研究所業績集* 12, 89-108
- Mason E.P. 1954 Some correlates of self-judgment of the aged. *J. Gerontol.*, 9, 324-337
- 村瀬孝雄 1973 文章完成法にあらわれた男子中学生の人格発達と精神的健康—3年間の縦断追跡的研究 *日本心理学会第37回大会発表論文集* 574-575
- 村瀬孝雄・下仲順子・新井弘子 1974 文章完成法にあらわれた女子中学生の人格発達 *日本教育心理学会第16回総会論文集* 236-237

- Neugarten, B.L. 1963 Personality and the aging process. In Williams, R.H., Tibbitts, C. and Donahue, W. (Eds) Process of aging. Vol. I Atherton Press.
- Preston, C.E. and Gudiksen, K.S. 1966 A measure of self-perception among older people. J. Gerontol., 21, 63-71
- Rosen, J.L. and Neugarten, B.L. 1960 Ego functions in the middle and later years; a thematic apperception story of normal adults. J. Gerontol., 15, 62-67
- 関増爾 1967 養護老人 home 入所者の日常生活動作能力の検討 浴風園調査研究紀要 45, 105
- Tallmer, M. and Kutner, B. 1969 Disengagement and the stresses of aging. J. Gerontol., 24, 70-75

(1975年3月13日受稿)

## ABSTRACT

### SELF PERCEPTS OF THE AGED

—a comparison of sct responses between groups of different living conditions and of different ages—

Yoshiko Shimonaka by & Takao Murase

Specially tailored SCT intending to elicit attitude toward one's own life, interpersonal attitude and value orientation of the aged were administered to two groups of subjects.

Group A were consisted of forty-six female subjects living with their families and group B of sixty-nine subjects living in an institution for the aged.

Each group was divided between a relatively younger sub-group (age : 60-74) and an older one (age : 75-).

Socio-educational background was controled to be almost the same between groups.

Findings 1. Those who live with their families (group A) showed much more positive feeling attached to their family image, to their attitude toward friend as well as to their own self image compared with group B responses. 2. In general self percepts of group A subjects were more clearly differentiated than ones of group B. 3. Their interest in future was more positive than B subjects. 4. Negative attitude toward life and accepting attitude toward death were characteristic of group B while group A were either ambivalent or positive toward life and objective toward death. 5. Group B tended to see little

enjoyment in anything whereas group A tended to enjoy their interpersonal relationships. 6. The attitudinal change of B subjects by ageing was another kind of their salient features. In contrast to consistently positive image of family as well as one's own future of group A subjects through ageing, B subjects were characterized by attitudinal change through ageing. Younger institutionalized subjects tended to view their families either negative or neutral whereas older B subjects viewed it with positive but basically unconcerned attitude. It was noticeable that the younger B subjects tended to be concerned about their future health while the older ones were simply concerned about *status quo* as to their future.

Interpretation Different attitude toward self and others between two groups was interpreted as, at least partly owing to their difference in ego strength. Disengagement theory of attitudinal change in company of ageing was considered effective only to explain some features of the institutionalized subjects. In order to interpret our findings more satisfactorily, two additional psychological mechanisms, namely denial and reengagement, were tentatively postulated.